

マスターズを彩るレジェンドたち(32)

ひな人形を飾って幸福を祈る行事とされる3月3日のひな祭りが過ぎ、冬ごもりしていた虫が外へ出る啓蟄(けいちつ)の5日も過ぎた。本誌の発売日の14日はホワイトデー。バレンタインデーでプレゼントを受けた人は、お返しをされたらどうか。20日の春分の日が過ぎれば、いよいよ春が。マスターズ会員の皆さんにとっては「春よ早く来い」と待ちわびているはず。野外での練習を“早く”と。今月号もレジェンドの続編を。

中澤学さん(60歳・静岡) M60走幅跳、三段跳

バラ色だった2024年。同年8月、中澤学さんがスウェーデンのイエーテボリであった第25回世界マスターズのM60クラス・三段跳で12m05を跳び、世界ナンバーワンに輝いたのだ。加えて9月に京都で行われた第45回全日本マスターズでは、M60・走幅跳で5m69(+1.3)の日本新、大会新で1位。三段跳は11m95(+1.3)の大会新でトップとなり二冠を達成、最優秀選手賞(織田賞)に選ばれた。

世界マスターズと日本マスターズで好成績を挙げた中澤さんの快挙はこれだけではない。10月末の東海マスタ

ーズの走幅跳では5m78(+1.6)を跳び、M60クラス日本新記録をマークしたのだ。

まさにバラ色だった2024年のシーズン。ここで話題を世界一になった世界マスターズに戻そう。スウェーデンの助走路に立った中澤さんの、最初の競技は走幅跳だった。ところがウォームアップ中に脚に違和感があり、助走で走り出すと脚がつり、万全のジャンプができなかった。満足なジャンプができなかっただけでなく、脚の具合が……。脚の状態が悪いなかでの跳躍は5m74の4位。この記録も日本記録を上回るものだが、追い風2.3mで参考記録となった。走幅跳の4日後に行われたのが三段跳だ。「この3日間、脚のケアに。脚の状態が良くないので、1本目に集中して跳ぼう」と、最初の跳躍で出したのが12m05だ。中澤さんは「よくもあんな状態で跳べたもんだ」と振り返る。

ところで中澤さんの「跳躍人生」はいつから始まったのか。現在はマスターズだが、競技歴は中学生時代から。高校は陸上の名門、静岡県の浜松商だ。同校はインターハイの男子対校戦での優勝歴のほか、五輪代表も1960、64年のローマ、東京の跳躍に太田富夫をはじめ、数名を数える。

中澤さんは高3の82年、同県の高校对校選手権の三段跳で14m86(同年高校ランク9位)で1位。インターハイ最終予選の関門、東海大会に進んだまでは良かったのだが、競技中に三段跳のホップで右足首を痛め、涙をのんだ。「そのときの悔しさは今も覚え

ています」と中澤さん。その後、大体大に進んだ大学時代も挫折を味わった。高校時代と同じ足の故障だ。入学1年目に14m84の後、2年生で15m19、4年生の初戦で15m36と記録を伸ばし、「ようし、ここからだ」と気合を入れたが、練習中に足首を骨折……。ここで一度、陸上とは縁が切れた。

中澤さんが社会人となり、30歳近くなった頃、マスターズ陸上を知り入会した。31歳で出た初の全日本マスターズ陸上・神奈川大会のM30・走幅跳が7m14で1位、三段跳で14m56を跳び2位となった。全日本には「昨年の24年までに30回近く出ています」そうだ。

全日本マスターズのなかでも印象に残っているのは、14年にアジア大会を兼ね岩手県北上市であった第35回大会。M50・走幅跳に6m42(+1.0)でアジア大会と共に1位。三段跳は13m22(+2.2)の2位で、アジア大会でも2位だった。「三段跳の着地の後ろに手を着き、1位とわずか1cm差での2位。悔しさの残る思い出です」と話す。北上大会での思い出だ。19年の第40回記念国際マスターズの全日本大会ではM55・走幅跳に5m99(+0.3)の大会新、三段跳で12m81(+0.1)の日本新・大会新で2種目を制するなど数々の功績を打ち立ててきた。

初参加した世界マスターズとMVPとなった日本マスターズ、24年は思い出に残る大会で活躍できた。しかも世界大会で出した三段跳12m05は、同年度のM60クラスで世界ランク1位となったのだ。23年度まで地元の



2024年世界マスターズのM60クラス、中澤さんは三段跳(写真)で2位に25cm差をつける12m05を跳んで世界一に／中澤学さん提供写真

浜松市役所に勤めていた。今は週5日を陸上の練習に当て、三段跳で12m50を目標に「世界記録に挑戦したい」。走幅跳では「6mを目指して」と意気込む。

陸上を離れるとバイクが趣味のジャンパー。25年以後もバラ色を！

酒井あおいさん(50歳・愛知) 衰え知らぬスプリンター

以前にも登場いただいているスプリンターの酒井あおいさん。50歳になった24年に再度の輝きを。若い頃に陸上の経験はない。身に付けているのは小学生からやっている空手だ。空手は五段の実力。週2回は午前中、およそ3時間汗を流す。指導の方は毎日、各方面に出かけていき、午後6時から3時間程。教えている人数は会場によって違うが、各会場すべてで80人ほどになる。

陸上の練習も怠らない。こちらは週2回、時間をかけて納得するまで行く。「空手も陸上も楽しい」酒井さんにとって、陸上で24年はうれしいイベントが……。京都であった全日本マスターズの第45回大会だ。50歳の酒井さんはW50クラスの100m、200mと4×100mRの3種目に出た。

このいずれの種目でも1位を手にしたのだ。いわゆる三冠。100mは13秒05(−0.4)、200mが27秒60(−1.4)の各大会新。リレーは愛知チームの2走を担当して52秒56の日本新だった。リレーでは以前、49歳のときに同じ愛知チームでW30クラス、に加わり48秒29の日本新を出したこともある。このときは3走だった。

全日本マスターズ大会で出場3種目のタイトルを取った喜びと並び、記録面で快記録をマークした喜びもある。それは全日本の一月前に一宮で行われた愛知県尾張記録会。一般として出場し、100m12秒62(−0.3)、200m26秒36(+1.4)と2種目で日本新を樹立した。23年度時点の日本記録は100mが12秒99、200mは27秒08で、酒井さんがいずれも更新し

た。「全日本マスターズでの三冠もそうですが、私にとって、一宮での2つの日本新もとてもうれしい」と笑いながら。

「36歳だったか、37歳だったかに陸上のマスターズに入った」酒井さんは、38歳の12年に岡山市で行われた第33回全日本マスターズに参加した。初レースとなった60mで8秒25(+1.7)をマークして、いきなりの1位。100mは12秒97(+1.4)の3位。W35クラスで上々のデビューを飾った。岡山大会から1年後、佐賀であった第34回全日本マスターズでは39歳と、W35クラスでは不利な年齢にもかかわらず、60m7秒98(+2.7)、100m12秒77(+1.0)、200m26秒01(+2.4)で3種目とも負け知らず。三冠達成だ。不利な年齢など「われ関せず」とばかり、60mで7秒92の日本記録を生んだ。

この後も酒井さんの進撃は続く。不惑の40歳では岩手県北上市でのアジアマスターズを兼ねた全日本マスターズの100mを12秒77(+2.7)で1位の座に。次年の15年は41歳での全日本マスターズ大会(岐阜)で、W40クラスの60m、100m、200mの3種

目に勝った。度重なる三冠の輝き。勢いに乗った酒井さんは16年の10月、豪州パースでの第22回世界マスターズに初めてエントリーした。年齢は42歳でW40クラスの100mで力走。追い風3.8mを背に12秒78で6位に入った。

「初めての世界大会だったので感動しました」

しばらく全日本マスターズ大会を欠場した後の19年、日本陸連主催の第103回日本選手権(福岡)の100mにマスターズの部が設けられた。

酒井さんはW40クラスに選拔され、12秒86で1位となった。「日本選手権という最高の舞台で走れたことは、思い出深い」と。この後「1位となれて緊張が解け、うれしさも倍増でした」とも。44歳での感激だった。

「30歳代の時より、50歳になってからの方がタイムが上がって」と言って笑った。これからもW50クラスの100m12秒62の自ら出した日本記録より「さらなる更新を」目指して精進するスプリンターに期待を！ 酒井さんは「26年に韓国で予定されている世界マスターズに参加したい」と意欲を燃やしている。



昨年の全日本マスターズW50・4×100mRを日本新・大会新で制したメンバー。右から走順に浅井紀子さん、酒井さん、宮本百合さん、山崎めぐみさん／酒井あおいさん提供写真